

伝統を結ぶパレスチナ刺繍帯



パレスチナ刺繍帯プロジェクト 代表 山本 真希

長い歴史の中で日本とユーラシア大陸の国々や地域は、シルクロードを通して人々や物資や伝統工芸品が行き交い、各々の文化と融合し、さらに独自の文化を育んできた。着物に用いる絹織物も、「唐草」「鳳凰」などの「正倉院文様」や「青海波」といった文様も、シルクロードを通して大陸から伝来してきたものである。現代においても着物愛好家の間では、旅先で購入した異国の布、たとえばインドネシアのバティック、インド更紗、ウズベキスタンの刺繍布などを、世界に一本だけの自分のための帯として詠えて装いを楽しんでいる。こういった外国布の着物や帯をあつかう呉服店も多数ある。着物好きの筆者も「これぞ現代のシルクロード！」と、当初は自分用の趣味としてパレスチナ刺繍帯を詠えた。

パレスチナの出会いは15年ほど前、駐日パレスチナ常駐総代表部のシラム大使夫妻とお会いしたことである。そのご縁から2013年にヨルダン川西岸地区を初訪問した。パレスチナ人がおかれている厳しい現状を目の当たりにし、何か自分にできることはないだろうかということで、パレスチナの美しい文化を日本で紹介しようという結論にいたった。パレ



駐日パレスチナ大使夫人 マーリ・シラムさん



女優 サヘル・ローズさん

スチナ刺繍の着物の帯としての美しさ・ユニークさ・ポテンシャルの高さは、客観的に見ても素晴らしく、パレスチナの文化継承と女性の経済的な自立のサポートのためにパレスチナ刺繍帯の制作販売をはじめることにした。

パレスチナ刺繍とは

古代から連綿と続くパレスチナ地方における染織産業の歴史は古く、刺繍で装飾された衣装をエジプトのファラオに献上していたという記録も残っている。「パレスチナ刺繍」というカテゴリーは18~19世紀にかけてパレスチナ人（パレスチナに住むアラブ人）によって形作られた。刺繍技法としては主にクロスステッチやカウチングステッチという普遍的な技法であり、パレスチナ刺繍らしさは、それらのステッチから生み出されたユニークな文様である。もともとは、農民や遊牧民が野良着を補強するための刺繍から発祥し、身の回りの景色や日々の生活を刺繍で表現するようになった。「糸杉」「オレンジの花」「ラクダの目」「鳥」「老人の歯」など、数多くの文様がうまれた。刺繍は都市部の女性にも広がり、エルサレムやベツレヘム、ジャッファなどの裕福な女性たちは金糸や銀糸を用い、手間ひまかけて豪華な刺繍ドレスをつくり始めた。女性たちは誰もが幼いころから母親や祖母から刺繍を習い、自らの花嫁衣裳をつくるほどの腕前であった。ドレスだけでなく、クッションカバーやタペストリー、ハンカチなど身の回りのあらゆるものが刺繍で彩られた。刺



イマジン・ワンワールド KIMONO プロジェクトに詠えたパレスチナ刺繍帯。文様は左から「麦の穂」「水ガメ・ブドウ・花」「(瀉血用) ヒル」「真実の木」「ベツレヘムの星」「王冠」「エルサレムのタイル」



パレスチナ各地域特有の伝統衣装がある
© Palestinian Heritage Center

繡はパレスチナ女性の日々の生活に密接に結びついた伝統工芸であり，自分の出身の地方・村や家族，その社会的な立場も表すものであった。20世紀初頭になりパレスチナ刺繡ドレスがヨーロッパや近隣諸国に知られるようになるのと，とりわけ腕のよい女性は，刺繡を仕事として請け負うようになった。

1948年のイスラエル建国にともない多くのパレスチナ人が難民となってからは，状況は一転し，刺繡をする余裕はなくなった。しかし，時がたつにつれ刺繡はパレスチナ人の文化的なアイデンティティを表すものとして復興しはじめる。現在パレスチナ刺繡はパレスチナ女性がお金を得る貴重な手段でもあり，様々なNGOや国際団体が制作・販売を支援している。現在は紛争の影響に加え，現代化による若者の伝統衣装離れやミシン刺繡の普及が進んでいるため，販売できるような手刺繡技術をもつ女性たちは限られている。街中の露店でもパレスチナ刺繡のモダンなドレスをみかけるが，ほとんどミシン刺繡だ。手刺繡のドレスはとても高価で，多くのパレスチナ人には手が届かない。手刺繡のパレスチナドレスを購入するのは，パレスチナ自治区内に住んでいる裕福なパレスチナ人と，故郷を離れディアスポラとなった裕福なパレスチナ人に限られている。このようなことから，



刺繡がしてあるトレイ
ヨルダン川西岸地区ラマラ郊外
アイン・キーニア村



ヨルダン川西岸地区ラマラ郊外の
オリーブ農村アイン・キーニア村の
刺繡職人ハディージャさんと30年
前につくった刺繡ドレス



筆者がオーダーしたストールを刺繡する女性たち
ヨルダン川西岸ラマラ郊外アロウラ村

パレスチナ刺繍の販路を広げるには、新たなマーケットをつくる必要があり、近年は外国人向けに手刺繍のポーチやストールといったものも作られている。

パレスチナ刺繍帯の制作

筆者は年に2-3回ヨルダン川西岸地区を訪問しながら帯の制作をしている。今のところ帯をオーダーしている団体は4つあり、主に難民とオリーブ農家の刺繍職人である。

帯をつくる過程としては、①パレスチナ現地にて刺繍の文様と色を決める。②職人が家に持ち帰り刺繍する（ものによって1-5か月）③次回もしくは次々回の訪問時に完成品の検品と受けとり、支払いをする。④刺繍布を日本に持ち帰り、和裁職人に仕立ててもらう。

オーダーした色と違う、幅や長さが違う、ということはよくある。始めたばかりの頃は、オーダーと違うものでも「時間かけて作ってくれたのに、買わないのはかわいそうだ・・・」と、買い取っていた。しかし、長期的に考えると、それはパレスチナの人々のためにならない。日本で販売できるものを作ってもらわないと、その団体にはオーダーできなくなる。今では、日本の市場と目の肥えた消費者の説明をし、「オーダーと違うものを作っても、購入しない」と明言している。心がけていることは、パレスチナの人々に「お金をもらって仕事をする責任感」を持ってもらうことだ。日本向けのパレスチナ刺繍帯づくりは、要求が多く簡単ではない。しかし、その仕事を乗り越えたあとの達成感



ヨルダン川西岸地区ナブルス・バラタ難民キャンプの刺繍職人
ザキヤさん



パレスチナ刺繍帯をしたてる一級和裁職人

自信・喜びとなり，次に向かう活力となる。帯をつくるモチベーションを高めてもらうためにも，制作してもらった帯がどのような使われ方をしているか，どのような方に購入いただいたか，フィードバックしている。パレスチナでも定期的に文化イベントを開催し，ファッションショーで帯のお披露目をして，刺繍の仕事の成果をわかりやすい形で伝えるようにしている。腕のよい職人は，家事や子育ての間に刺繍の仕事をするこゝで，子供の大学の学費も稼ぐことができる。ただ支援されるのを待つのでなく，努力によって技を磨き，仕事をする喜び・苦勞を感じ，一つ一つ作品を作り続けるこゝで，未来が開けると考えるからだ。

とはいっても，日本の消費者向けのクオリティを保つために，日本側の言い分だけを押し通すわけにはいかない。パレスチナにはパレスチナのやり方があり，それを尊重することも大事だ。そのために，パレスチナでのモノヅクリにおける優先順位をつけている。第一は，「刺繍の美しさ，色や長さがオーダー通りであるこゝ」。パレスチナ刺繍帯を一目見た人々に感動を与えることができるか？言葉なしに人々の気持ちを動かすことができるようなモノでないと，勝負にならない。そのため，刺繍の質にはこだわっている。次に，「納期」だ。オーダーメイド品については，納期が遅れる可能性があるこゝも予め購入いただく方に承諾いただくようにしている。パレスチナ刺繍帯のエピソードも不可欠な要素だ。パレスチナの文化や刺繍の歴史，現在のパレスチナ人がおかれている厳しい状況や，刺繍が女性の自立支援につながるこゝを伝えている。着物を着る女性が減っている中，数ある帯の中からパレスチナ刺繍帯を選んでいただくかなければならない。そのためには，圧倒的な美しさと，物語，他では入手できない唯一無二な存在である必要がある。

絹のパレスチナ刺繍の復刻

現在，帯を含めパレスチナ刺繍は綿糸でつくられている。しかし，パレスチナでは20世紀中頃まではシリアやレバノン産の絹糸で刺繍をしていた。イギリス委任統治時代の1920年代頃から，フランスの大手メーカー製の綿糸が使われ始めた。絹糸の扱いはとても難しいということもあり，徐々に扱いやすい綿糸が主流となった。現在パレスチナ自治区で流通している刺繍糸はほとんどが仏製綿糸で，絹糸は全く流通していない。絹糸刺繍によるアンティークのパレスチナドレスは光沢がとても美しく，綿糸による素朴な風合いとはまた違う。



制作してもらった帯の締め方を説明
ヨルダン川西岸ラマラ郊外デール・
アル・スーダン村の刺繍職人サーミ
アさん宅

着物を着る上でTPOは大事で、綿刺繍の帯は日本での格式ある会では着用できない。そこで目標としているのが「絹のパレスチナ刺繍帯」の制作だ。

絹糸を探すところから始まり、東京農工大学の川端良子准教授がウズベキスタンで養蚕による農村復興プロジェクトを行っていることを知った。早速、川端准教授の案内でウズベキスタンの絹の都マルギランを訪問し、絹の刺繍糸を調達した。マルギランでは昔ながらの製法で、職人の自宅兼工房で生糸を染色している。その糸をパレスチナに持ち込み、小さな刺繍の試作からはじめている。将来的には絹のパレスチナ刺繍帯、絹のパレスチナ伝統衣装の復刻もしたい。

このようなモノヅクリと並行し、東京農工大学の博士課程に所属してリサーチ活動も開始した。パレスチナ刺繍はもともと農民や遊牧民がはじめた。現在もパレスチナ刺繍を副業にするオリーブ農家の女性が多い。パレスチナ刺繍が、パレスチナ女性の自立化にどういった影響を与えているか、パレスチナ刺繍の歴史的・文化的な背景もあわせてリサーチし、記録として残したい。

最後に、簡単に筆者の自己紹介であるが、学生時代は薬学・医科学を勉強し、社会人になってからは化粧品メーカーで研究開発をしながら趣味で諸外国との文化交流活動を続けていた。あるときに脱サラして文化交流事業を営む会社を立ちあげ、現在にいたる。これまでの様々な経験があるからこそ、パレスチナ刺繍帯づくりができるのだと思う。これからは、コツコツと活動を続けパレスチナ刺繍帯を広めていくつもりだ。



ヘブロン旧市街にて © Kotaro Manabe